

「病」は、現代思想において、主要な思考対象として、刺激的な言説を生産し続けてきた。欧米の現代思想における「病」といえば、M・フーコー、S・ソンタグ、S・ギルマンらの議論がある。彼らは、「病」が社会や権力によって構成された「言説」「隠喩」であることを明らかにし、マイノリティ分析のための方法論を創出した。また、私たちは、E・レヴィナスやJ・デリダやM・C・テイラーが、「アレルギー」「ウィルス」「自己免疫化」を、「他者」を論じる際の概念装置として用いたことを思い起こすこともできるだろう。結局こうした概念もまた、現実の病の「比喩」にほかならない。「病」は、一定のイデオロギーからは解放されながらもなお、「比喩」としての言説を生み続けている。

他方で、実際に「病」の治癒に携わる臨床的立場から発信された思想が存在する。こうした思想潮流は、今日の日本においても独特の存在感を誇っている。精神病理学は、宮本忠雄氏、木村敏氏、中井久夫氏といった個人的な思想家を輩出してきた。とりわけ哲学と精神病理学の接合によって「こともの」「あいだ」といった独創的な諸概念を創出し、精神疾患を

通じて人間の根本的な態勢を示すことに成功した木村氏、また、その文学的資質を発揮しつつ「予感」「索引」といった語彙によって独自の記憶論を提示した中井氏は、同時代の人文科学にとって、刺激的な存在であり続けている。彼らのこうした「病」に対する態度は、精神疾患を脳の機能不全へと還元する器質機能主義がドミナントな昨今、単純な自然主義に對する重要なオルタナティブだとも言えるだろう。

精神分析理論においても、臨床と不可分であることにこそその価値を見出す十川幸司氏の議論は、哲学とは異なる新しい方法論構築の可能性を感じさせる。氏は、不可能なものへの抵抗に遭うこと、つまり経験的領域と超越的領域のコンフリクトにおいてこそ、精神分析理論は生産的たりうると主張してやまない。十川氏にも大きな影響を与え、「オートポイエーシス」の理論で知られる河本英夫氏は、精神病理学者、精神分析家、さらには身体障害に立ち向かう理学療法士たちと連携しながら、相互にその活動を触発し合い、果敢に議論を展開させている。「自己の可能性は無限に拡張できる」と主張する河本氏において、「病」は経験の可能性に関わる重要なモメントのように見える。さらに、精神分析と精神病理学の両者を越境しつつ、「症状」と時代の文化的コンテクストをめぐって批評活動を行なう斎藤環氏の活動もまた、さまざまメディアで目覚ましい。

病に寄り添う思想家たちにとって、「病」は「比喩」ではない。さらに、彼らは「病」を超越的・